論　文

幼児期後期における「言葉領域」の発達と、子どもの成長全般への関連について

― よりよい保育実践の視座を得るために ―

柴　田　長　生・大　森　弘　子

1　はじめに

我が国の『幼稚園教育要領』は、2017（平成29）年に大幅に改正され（文部科学省，2017）、教職課程コアカリキュラムにおいて、指導法が従来の「教科」から「保育５領域」へと変更された（教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会, 2017）。保育５領域の一つである「言葉領域」について、幼稚園教育要領には「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し，相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て，言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」という教育目標が掲げられている。幼児期後期（3 ～ 6 歳）において、「言葉領域」の発達は大きな意味を有するが、単に言葉の獲得・上達のみにとどまらず、子どもの生活世界全般において、「言葉の発達」を基盤とすることで全体的・相対的な成長を大きく成し遂げることの意味合いが非常に大きい。

本研究では、幼児期後期における「言葉領域」に関する研究動向を概括した上で、「言葉領域」での育ちが、この時期の全体的な成長に対してどのような基盤となっているのかについて、第一筆者が行った「社会生活能力目安表（以下、「目安表」と略す）」改訂版尺度作成のための予備調査結果データを用いて検討を試みる（柴田, 2017）。そして以上の結果から、よりよい保育実践の視座を得るための考察を最後に行う。

2　先行研究

まず、幼児期後期における「言葉領域」について論考するため、「言葉の発達」及び「幼児」の２つのキーワードに関わる先行研究を概観する。これらの用語は、従来から扱われてきており、「言葉領域」の基本的な用語といえる。具体的な手続きとして、国立国会図書館の NDL-OPAC を使用し、幼児教育・保育分野に掲載された過去 10 年間の論文から検索した。また、幼児教育･保育領域の主要な学術雑誌２誌（『保育学研究』及び『乳幼児教育学研究』）に掲載された「言葉」に関わる過去 10 年間の論文を総覧した。検索時期は、2018（平成 30）年７月８日から７月 15 日であった。

実証的な論文としては、言葉（発話・対話）に着目した論文（e.g., 淀川, 2009 : 2010 : 2011 : 2013；並木，2012；辻谷，2015；辻谷・秋田, 2014）、絵本が言葉の発達に及ぼす影響を示した論文（e.g.，古相，2011；並木，2011；近藤・山本，2013；浅井・伊藤，2017）、書き言葉の発達を示した論文（e.g.，石本，2014）、言葉の発達相談支援を示した論文（e.g.，福丸・湯澤, 2018）、が明示されていた。この中で特に、本研究と関連する論文は、言葉（発話・対話）に着目した論文である。

例えば、淀川（2010）は、２～３歳児を対象に、保育集団における食事場面での対話の変化

を考察している。その結果、言語活動は二者間対話が連続して生じる時期から、三者間対話へと広がる時期を経て、三者間対話が連続して生じる時期へと変化することを明らかにしている。また、淀川（2013）は、2 ～ 3 歳での散歩場面の対話のあり方が時期によりどのように変化するかを分析している。その結果、体力差の縮まりや他児と歩調を合わせて移動できるようになると、目に見えない部分にも関心を寄せて対話していることを指摘している。

さらに、辻谷・秋田（2014）は、4 歳児を対象に、他者について言及する発話をエピソード記述し分析している。その結果、受容的態度の育ちを支えるものとして、保育者との安心できる関係に加え、主張・意向を安心して伝えられる相手との関係に伴う、園生活における安心感があることを示唆している。しかしながらこれらの論文は、対象が 2 ～ 3 歳児や 4 歳児等に限定されており、幼児期後期における言葉の発達と、成長全般への関連に着目した研究が見当たらない。そこで、幼児期後期における言葉の発達の連続性に関する各課題を明確化することは、よりよい保育実践の視座を得るために極めて有効性が高いと考えられる。

他方、『幼稚園教育要領』（文部科学省，2017）では、「幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」」が新たに提示された。その姿の言葉に関して、「言葉による伝え合い」は、「先生や友達と心を通わせる中で，絵本や物語などに親しみながら，豊かな言葉や表現を身に付け，経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり，相手の話を注意して聞いたりして，言葉による伝え合いを楽しむようになる。」と示している。この姿は、従来の保育内容「言葉」よりも、より具体的で明確化された姿を示している。こうした改正の中で、保育者養成校においては、明確化された子どもの「言葉の発達」の見方と対応を保育者志望学生や現職保育者に提示することで、幼児教育・保育の質の向上に寄与することも考えらえる。

3　研究方法

第一筆者は、子どもの社会生活能力を評価するために、「身辺自立」「移動」「作業」「意志交換」「集団参加」「自己統御」の 6 つの評価領域で構成される「目安表」を作成した（柴田，2006：2013：2014）。更に評価尺度の内容や配列の見直すために「目安表改訂版」を作成し、保育所保育士に担当乳幼児の「目安表改訂版」を使った評価（予備調査）を依頼した（柴田，2017）。

本研究では、幼児期後期の「言語領域」に関する検討を行うので、上記予備調査のうち、「作業」「意志交換（＝言葉）」「集団参加」「自己統御」の 4 つの評価領域における 3 歳 0 ヵ月～ 7 歳 0 ヵ月相当の評価課題について、保育所在籍の調査対象児童のうちの生活年齢 3 歳 0 ヵ月以上の児童についての評価結果データを分析対象とする。

分析対象とした評価領域における評価課題をまとめたものが**表 1** である。6 ヵ月毎に評価相当年齢を設定し、評価相当年齢毎に課題を設定している。各課題は、評価相当年齢のおおよそ 80％の子どもが達成できることを目安に構成しており、「これだけは獲得してほしい」と考える課題を厳選した（到達目標）。

表 2 には、分析対象とした子どもの性別・年齢別内訳を示した。

各課題について、通過したものに 1 点、不通過に 0 点を付与し、統計処理を行った。データ集計については The Card8 を使用し、統計処理については Excel 統計 2012 を用いた。

表１　社会生活能力目安箱（改定案 抄録）

年齢区分	作　業	意志交換	集団参加	自己統御
3:0	はさみでちょきちょきと紙を切る（形にならなくてもよい）	名前を尋ねられると氏名を答え、数種類の二語文を話せる	クラス集団の中で、皆と一緒に歌が歌える	単に「イヤだ」と反抗するのではなく、自分なりのつもりや自己主張をともなう
3:6	顔など、形のあるものを描きはじめる（丸の中に目や口らしきものが描かれている程度でよい）	自分が使いたい物を友達が使っている時に「かして」という	ままごとなどのごっこ遊びで役を演じる	促されれば、簡単な「きまり」を守ることができる
4:0	箸をなんとか使いこなして食べることができる（箸でつまもうとする）	「それは、どうしてなの？」「それからどうなるの？」といった質問ができる	運動会などで、リズムに合わせて、皆と一緒にお遊戯や踊りなどができる	欲しいものがあっても、説得されれば我慢できる
4:6	はさみで、簡単な形を切り抜くことができる	自分が経験したことを大人や友達に自分から伝え、会話を楽しむ	じゃんけんで勝ち負けがわかる	禁止されていることを他の子がやった時、その子を注意する
5:0	紙飛行機をよく飛ぶように、飛ばせ方や折り方などを、自分なりに工夫する	電話で、簡単な会話を続けることができる	ゲームなどで、年少の子どもを気遣ったり、手助けすることなどができる	大勢の人の中や乗り物の中でダダをこねたりしない
5:6	お菓子やおはじきなどを、５つづつ数えて袋詰めにすることができる	経験した場面を絵で描き、尋ねれば描いた内容を説明することができる	ドッジボールや鬼ごっこなどの集団遊びに、ルールを理解して参加することができる	夜、自分の部屋でひとりで寝ることができる
6:0	教えれば、ちょうちょ結び・丸結びなどがなんとかできる	何かを決める時、「～だから～しよう」と、理由をつけて提案できる	遊びや集団活動の中で、ゆずりあうことができる	1時間ぐらいなら、独りで留守番できる
7:0	定規を使って、直線や図形を描くことができる	日常の出来事を短い文章で書くことができる（日記や作文）	トランプ、カルタ、すごろくなどの簡単なゲームで、ルールを守り、友達と仲良く遊ぶことができる	教室で、30分ぐらいはいすに座って静かに勉強できる

表２　分析対象内訳

年齢区分	男	女	合計
3:0 － 3:11	9	7	16
4:0 － 4:11	7	7	14
5:0 － 5:11	7	7	14
6:0 －	5	6	11
合計	28	27	55

4　結果

(1) 全体的な結果

表３（柴田，2017 から引用）には、**表１**を基にした予備調査における「意志交換（言葉）」領域の各課題の年齢別通過率を示した。表中の年齢区画は３ヵ月毎に設定しているが、例えば 3:0 という区画には 2:11 ～ 3:1 の子どもが分類される。また、課題水準の表記について、例えば 3:0 水準の課題については「意志 30」と省略表記している（以下、他の評価領域・評価水準の課題についても、同様の表記を行っている）。

表３を検討するに当たり、意志交換（言葉）領域における各課題の発達的意義を簡潔に述べておく。意志 36：一方向的な言葉による意思表示。意志 40：生じている状況・文脈に関する一方向的な相手への質問。意志 46：他者との関係の中で会話を楽しむ（自分からの発話優位）。意志 50：言葉だけで、相手の言葉を受け止めた上で会話を連続させる。意志 56：相手との関係で状況や文脈全体を順序づけて語る。意志 60：状況を踏まえた上で、それに配意して（他者への配意を含めて）解決を志向し、言葉で調整する。

表３から、以下のことが読み取れる。

① 意志 40 までの能力は、ひとまとまりで育っている。幼稚園年少児期の言葉領域に

おける獲得課題と見なすことができよう。この段階はまだ、言葉を用いた相手への一方向的な関与である。

② 意志 46 以降の課題は段階的に育っており、幼児期後期の言葉課題の中核であろう。「相手との会話を楽しみ始めることができる」意志 46 は、年中期に入る頃にはほぼ獲得される。

③ 次の「言葉だけでの会話を連続させることができる」意志 50 の獲得までには 1 年以上の時間を要する。「相手との関係で状況や文脈全体を順序づけて語ることができる」意志 56 とともに、6 歳前にならないと成立せず、年中期から年長期にかけて獲得される幼児期後期の中心課題であろう。

④ 意志 60 は、年長期の中で育みはじめる、幼児期後期の「言葉」の到達点であろう。

⑤ 意志 50（電話での会話）は、全員獲得に至るまでの時間経過が長く、幼児期後期の言葉能力獲得の開始を告げるこの課題の成否が、幼児期後期の「言葉能力」のメルクマール（指標）として位置付くのではなかろうか。課題通過の様子が、「言葉の生育は個人差が比較的大きい」と言うことを表しているのではなかろうか。

各領域の獲得点数の平均値に対して t 検定を行ったが、全ての領域間で有意差は見られなかった。男女間での t 検定を用いた比較も行ったが、同様に有意差は見られなかった。「作業」「意志交換」「集団参加」「自己統御」の 4 領域の獲得得点データに対してクロンバックの α 係数を求めると 0.96 であり、目安表データの信頼性に問題は見られなかった。

各領域の獲得点数に対して行った重回帰分析の結果をまとめたのが**表 4** である。**表 4** から以下のことが読み取れる。

① いずれの目的変数に対しても R2 乗値（説明寄与の度合い）は高いが、各課題そのものが年齢経過にきわめて依存性の高い課題なので（発達を標榜するインデックスとしての各課題）、この結果は当然と言える。

② 意志交換（言葉）領域の結果は、他の領域の何れの結果とも相互に関連する。作業領域については、他の 2 つの領域に比較すると関連がやや薄い。

③ 説明変数と目的変数との関連で、偏回帰

表 3　意思交換領域における、課題別・年齢区分別通過率一覧（抄）

年齢区画	N	意志30	意志36	意志40	意志46	意志50	意志56	意志60	意志70
3:0	4	50.0%	50.0%	25.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
3:3	3	33.3%	66.7%	33.3%	33.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
3:6	2	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
3:9	7	100.0%	100.0%	100.0%	57.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
4:0	1	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
4:3	6	100.0%	100.0%	100.0%	83.3%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
4:6	4	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	25.0%	0.0%	0.0%	0.0%
4:9	1	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
5:0	3	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	66.7%	0.0%	0.0%	0.0%
5:3	3	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	66.7%	66.7%	0.0%	0.0%
5:6	7	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	85.7%	100.0%	28.6%	0.0%
5:9	3	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	33.3%	0.0%
6:0	3	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	66.7%	100.0%	66.7%	0.0%
6:3	8	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	62.5%	0.0%

表４　各領域の獲得点数データに対する重回帰分析結果

目的変数	R2乗	説明変数							
		意志交換		作　業		集団参加		自己統御	
		偏回帰係数	検定	偏回帰係数	検定	偏回帰係数	検定	偏回帰係数	検定
意志交換	0.908			0.196	*	0.286	**	0.497	**
作　業	0.861	0.411	*			0.647	**	−0.027	
集団参加	0.884	0.457	**	0.493	**			0.056	
自己統御	0.824	0.788	**	−0.020		0.056			

** $p < 0.01$　* $p < 0.05$

係数（説明寄与の割合）を見ると、例えば意志交換（言葉）に対する集団参加の係数が0.286なのに対して、集団参加に対する意志交換（言葉）の係数は0.457と高くなっている。この傾向は他の領域に対しても同様の傾向を示す。意志交換領域での能力（言葉の能力）がよりベーシックな力となって、子どもの生活世界を形成する「作業」「集団参加」「自己統御」といった相対的な領域での能力形成を支え、促す結果となっていないか。言葉の能力の大きな発達は、幼児期後期において本格的に開始される。

④　自己統御領域に対しては、意志交換（言葉）に対してだけ関連性を示す。言葉は、対外的に大きな力を発揮するだけでなく、自らの形成やコントロールに対してもベーシックな力となることが示唆される。

⑤　作業と集団参加の関連がかなり高い。双方共に年齢に応じた「具体的な獲得能力」を評価したためであろうか。

(2) 作業領域との関連

作業領域の成長と意志交換（言葉）領域の成長との関連を検討するために、意志交換（言葉）領域の各問を通過した者の内、作業領域の各問を同時に通過した者の割合を示したのが**表5**、意志交換（言葉）の各問が不通過なら、作業領域の各問が不通過である割合を示したのが**表6**である。比較しやすくするために、表中には、比較条件としている各設問内容の要約を、それぞれの比較条件の下に記している。また各表において、90%以上の区画・70%以上の区画を明示するために、太線で境界を表示している。各表における、例えば「意志36」という表記は、意志交換（言葉）領域の3歳6ヵ月相当の課題であることを示している（後述の集団参加領域・自己統御領域との関連記述においても同様）。

表5・表6から以下のことが読み取れる。

①　作業30・40と意志36・40（意志46）との関連を見ると、相互に関連し合っているようには思われない。双方領域ともに単純な獲得能力であるためなのであろうか。

②　**表6**をみると、「意志46 ×なら」以降で、「作業40 ×」と「作業46 ×」の結果に大きな比率の差が見られる。作業46：状況に合わせた作業行為（子どもが単に「切り取る」という作業能力を獲得しただけではダメ）、作業50：飛行結果を読み取り、その場の他者とも状況を会話しながら工夫する活動、作業56：他者に教えてもらい、やり方を尋ねることによって上達し、正確度を増していくような作業内容、というように作業課題の特性を解釈してみると、幼児期後期の言葉能力の獲得と作業遂行との関連が急にクローズアップされてくると考えることができよう。

③　両領域の関連は、とりわけ意志50以降の言葉能力において顕著である。両領域の

表 5　意志交換（言葉）領域―作業領域間の通過率関連 1

条件 設問内容	作業30〇 はさみ使う	作業36〇 形あるものを描く	作業40〇 用箸	作業46〇 はさみで切り抜き	作業50〇 紙飛行機・工夫	作業56〇 数数え・袋詰め	作業60〇 ひも結び	作業70〇 定規で図形描画
意志36が〇の内「かして」という	94.2%	92.3%	92.3%	59.6%	46.2%	42.3%	17.3%	1.9%
意志40が〇の内「どうして？」と質問できる	98.0%	96.0%	96.0%	62.0%	48.0%	44.0%	18.0%	2.0%
意志46が〇の内経験したことを伝え、会話する	97.7%	97.7%	95.5%	70.5%	54.5%	50.0%	20.5%	2.3%
意志50が〇の内電話で、簡単な会話を続ける	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	83.3%	87.5%	37.5%	4.2%
意志56が〇の内経験場面を描き、内容を説明	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	91.3%	95.7%	39.1%	4.3%
意志60が〇の内何か決める時、理由込みで提案	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	40.0%	10.0%

表 6　意志交換（言葉）領域―作業領域間の通過率関連 2

条件	作業30×	作業36×	作業40×	作業46×	作業50×	作業56×	作業60×	作業70×
意志36が×なら	100.0%	66.7%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
意志40が×なら	100.0%	80.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
意志46が×なら	45.5%	45.5%	45.5%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
意志50が×なら	19.4%	19.4%	22.6%	77.4%	87.1%	96.8%	100.0%	100.0%
意志56が×なら	18.8%	18.8%	21.9%	75.0%	90.6%	100.0%	100.0%	100.0%
意志60が×なら	13.3%	13.3%	15.6%	53.3%	68.9%	73.3%	88.9%	100.0%

凡例　90%以上の境界　70%～89%の境界

関係は相互補完的で、「よりよい言葉能力が作業能力を高め、様々な作業体験を通して言葉能力が向上していく」という状況なのであろう。このような相互補完的な成長が幼児期後期の成長の大きな特徴である。先述した**表 4** の分析結果を加えると、よりベーシックな発達基盤として、言葉の成長の成否が相互補完的な成長の要となるのかもしれない。

(3) 集団参加領域との関連

集団参加領域の成長と意志交換（言葉）領域の成長との関連を検討するために、意志交換（言葉）領域の各問を通過した者の内、集団参加領域の各問を同時に通過した者の割合を示したのが**表 7**、意志交換（言葉）の各問が不通過なら、集団参加領域の各問が不通過である割合を示したのが**表 8** である。

表 7・表 8 から以下のことが読み取れる。

①　意志 36 以降の言葉能力の発達が、より

表７　意志交換（言葉）領域―集団参加領域間の通過率関連１

条件 設問内容	集団30〇 一緒に歌唱	集団36〇 ごっこ遊びで演役	集団40〇 お遊戯・踊り	集団46〇 じゃんけん理解	集団50〇 年少児を助ける	集団56〇 集団遊びルール	集団60〇 譲り合い	集団70〇 ゲームルール遵守
意志36が〇の内「かして」という	100.0%	92.3%	96.2%	67.3%	48.1%	42.3%	32.7%	1.9%
意志40が〇の内「どうして？」と質問できる	100.0%	96.0%	100.0%	70.0%	50.0%	44.0%	34.0%	2.0%
意志46が〇の内経験したことを伝え、会話する	100.0%	95.5%	100.0%	79.5%	56.8%	50.0%	38.6%	2.3%
意志50が〇の内電話で、簡単な会話を続ける	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	87.5%	83.3%	70.8%	4.2%
意志56が〇の内経験場面を描き、内容を説明	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	91.3%	95.7%	73.9%	4.3%
意志60が〇の内何か決める時、理由込みで提案	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	90.0%	10.0%

表８　意志交換（言葉）領域―集団参加領域間の通過率関連２

条件	集団30×	集団36×	集団40×	集団46×	集団50×	集団56×	集団60×	集団70×
意志36が×なら	0.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
意志40が×なら	0.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
意志46が×なら	0.0%	45.5%	45.5%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
意志50が×なら	0.0%	22.6%	16.1%	64.5%	87.1%	93.5%	100.0%	100.0%
意志56が×なら	0.0%	21.9%	15.6%	62.5%	87.5%	100.0%	100.0%	100.0%
意志60が×なら	0.0%	15.6%	11.1%	44.4%	66.7%	73.3%	82.2%	100.0%

凡例　90%以上の境界　70%～89%の境界

高度な集団参加能力の実現と関連している。初期の一方向的にせよ他者に対して発話ができることが、集団参加への第一歩となる。そのことを通して言葉活動が活性化される（作業領域との違い）。

②　**表７**は、両領域の関連が能力獲得の深化に伴って段階的に深まっていく様子をよく示している。関与のレベルとして、まず他者に話しかけていけるという段階（意志36･40）の習熟と、言葉での会話が連続し、状況に文脈に沿って会話の展開ができるという段階（意志50・56）の２つのレベルを指摘できる。

③　集団参加の課題特性を考えると、集団40までが一緒に何かできる課題であるのに対して、集団46以降は関係性の中での集団活動が課題となっており、この実現のために意志46（あるいは意志50）以降の能力が必要となってくる。これは②で述べた第２のレベルに相当する。

④　幼児期後期の到達目標として、両領域の６歳０ヵ月水準の課題成就があげられる。

表 9　意志交換（言葉）領域―自己統御領域間の通過率関連 1

条件 設問内容	統御30〇 自己主張伴う反抗	統御36〇 簡単な「きまり」守る	統御40〇 ほしいもの我慢	統御46〇 他児を注意	統御50〇 ダダこねしない	統御56〇 夜ひとりで就寝	統御60〇 1時間留守番	統御70〇 座って学習
意志36が〇の内「かして」という	96.2%	100.0%	98.1%	86.5%	40.4%	15.4%	11.5%	1.9%
意志40が〇の内「どうして？」と質問できる	100.0%	100.0%	100.0%	90.0%	42.0%	16.0%	12.0%	2.0%
意志46が〇の内経験したことを伝え、会話する	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	47.7%	18.2%	13.6%	2.3%
意志50が〇の内電話で、簡単な会話を続ける	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	79.2%	33.3%	25.0%	4.2%
意志56が〇の内経験場面を描き、内容を説明	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	87.0%	34.8%	26.1%	4.3%
意志60が〇の内何か決める時、理由込みで提案	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	40.0%	40.0%	10.0%

表 10　意志交換（言葉）領域―自己統御領域間の通過率関連 2

条件	統御30×	統御36×	統御40×	統御46×	統御50×	統御56×	統御60×	統御70×
意志36が×なら	100.0%	66.7%	66.7%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
意志40が×なら	100.0%	40.0%	60.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
意志46が×なら	45.5%	18.2%	27.3%	90.9%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
意志50が×なら	16.1%	6.5%	9.7%	32.3%	93.5%	100.0%	100.0%	100.0%
意志56が×なら	15.6%	6.3%	9.4%	31.3%	96.9%	100.0%	100.0%	100.0%
意志60が×なら	11.1%	4.4%	6.7%	22.2%	75.6%	91.1%	95.6%	100.0%

凡例　━━━━　90%以上の境界　　┅┅┅　70%～89%の境界

⑤　両領域の成長は、作業領域で述べたことと同じく相互補完的なものであろうが、先述の**表 4** の結果から、よりベーシックな発達基盤として、言葉の成長の成否が相互補完的な成長の要となるのかもしれない。

(4) 自己統御領域との関連

自己統御領域の成長と意志交換（言葉）領域の成長との関連を検討するために、意志交換（言葉）領域の各問を通過した者の内、自己統御領域の各問を同時に通過した者の割合を示したのが**表 9**、意志交換（言葉）の各問が不通過なら、自己統御領域の各問が不通過である割合を示したのが**表 10** である。

表 9・表 10 から以下のことが読み取れる。

①　両領域の相互関係は、作業領域・集団参加領域で示された関連ほど一見明確ではない。

②　統御 46・50 は他者との関係の中での行為であり、意志 46（あるいは意志 50）との関連が示唆される。

しかし**表 4** は、自己統御領域への説明変数と

して意志交換（言葉）領域だけが説明寄与を果たしているという結果であり、このことをどのように考えればいいのであろうか。自己統御の各問が不通過なら、意志交換（言葉）の各問が不通過である割合を示したのが**表 11** である。

表 11 は**表 10** の結果とは異なり、自己統御の各課題のできなさが、意志交換（言葉）の各課題のできなさと段階的な関連を有することを示している。自分で自分を TPO に合わせてコントロールできるということと、自分の内側にある他者（Wallon，1983）やその他者との TPO の中で内なる他者とやり取りできるという事が関連するのであれば、そのプロセスで関与する能力はやはり言葉であり、そのやり取りの結果として自らが統御されるのであれば、それは非常に興味深い結果である。内界での言葉活動は、実際の外界に存在する他者との言葉活動と重なってくるはずである。このような活動を発展的に開始できる端緒が幼児期後期であり、後の児童期を準備するのであろう。そしてよりベーシックな発達基盤として、言葉能力の成長の成否が幼児期後期の発達全体を支えるのであろう。**表 4** の結果は、このことの証左ではなかろうか。

5　考察

本研究では、幼児期後期における「言葉領域」での育ちが、この時期の全体的な成長に対してどのように関連しているのかを検討した。具体的には、「目安表」の中から「作業」「意志交換」「集団参加」「自己統御」の 4 つの予備調査結果データを用い、幼児期後期の育ちを検討した。その結果、主に次の 4 点が明らかになった。

(1)「目安表」から見た幼児期後期における言葉の能力の発達

言葉の能力の発達は、幼児期後期において本格的に開始されることが明らかになった。特に、言葉を用いた相手への一方向的な関与は 3 歳頃から始まり、「作業」「集団参加」「自己統御」の領域での能力形成を促進することが示唆された。これは、「およそ 3、4 歳頃には統語上の基本的骨組みが一応完成する」との知見（新井，2009）や、「おおむね 3 歳は、理解できる語彙数が急激に増加し、日常生活での基本的な言葉のやり取りができるようになる」との報告（松田，2016）と一致する。また、言葉の発達には、Bates（1976）の伝達意思を整理した「コミュニケーションの 4 つの段階」における「3 歳頃から大人の会話スタイルに近づく」との知見（里美，2005）が示唆しているように、3 歳

表 11　意志交換（言葉）領域―自己統御領域間の通過率関連 3

条件	意志30×	意志36×	意志40×	意志46×	意志50×	意志56×	意志60×	意志70×
統御36が×なら	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
統御40が×なら	100.0%	66.7%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
統御46が×なら	40.0%	30.0%	50.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
統御50が×なら	11.8%	8.8%	14.7%	32.4%	85.3%	91.2%	100.0%	100.0%
統御56が×なら	8.5%	6.4%	10.6%	23.4%	66.0%	68.1%	87.2%	100.0%
統御60が×なら	8.2%	6.1%	10.2%	22.4%	63.3%	65.3%	87.8%	100.0%

凡例　―――― 90%以上の境界　-·-·- 70%～89%の境界

頃は、会話（話し言葉）の基本的骨組みが一応完成すると言える。

例えば、3 歳頃には、初歩的な日常生活の模倣である「ごっこ遊び」が登場する。その中でも「お店屋さんごっこ」における 3 歳児初期の特徴は、「いらっしゃいませ」「ドーナツください」「あまいなぁ」と一人で会話する場面が見られることである。その後、加齢と共に、子ども同士で会話を楽しみながらお店屋さんごっこをする姿が見られる。これらのことからも、言葉の能力の発達が加齢と関係することは、納得できるところである。

従来から現場感覚で感覚的に論じられているように、保育実践の視座として保育者は、3 歳頃に「ごっこ遊び」が盛んであるかを保育の判断基準にすることが肝要であろう。

(2)「言葉領域」の育ちと子どもの全体的な成長との関連

「言葉領域」の育ちを「目安表」によって的確に捉えることができるため、他の領域との関連についても詳細に検討する必要があった。そこで、幼児期後期における「意志交換（言葉）領域」の育ちと子どもの成長全般との関連を検討した。その結果、「言葉領域」での育ちが、「作業」「集団参加」「自己統御」へ影響を及ぼすことが確認された（**表 4**）。さらに、「言葉領域」での育ちが、子どもの全体的・相対的な成長へと押し上げることが示唆された。岡本（1982）は、「（言葉の組織的獲得後に）その生活を言語化し、人々との交わり方を変え、自分の行動をコントロールし、自我感情を客観化し概念や知識の形成に参加してくる。」と指摘し、言葉が発達の中から生まれ、成長全般の発達そのものに影響を与えると論じている。

例えば、動物園への遠足後の 5 歳児クラスにおいて、子どもたちが首の長いキリンを、段ボールに絵の具で描いたり、パズルブロックを使って作る場面が見られる。その時、作り方の説明書を見ても解らず、友だちと一緒にキリンの載っている絵本や図鑑を見ながら「どうやってつくったらいいのかな？」『ここを長くしたらいいよ』「てつだって」『いいよ』と想像しながら作っていくプロセスが想起される。このプロセスで関与する能力が言葉であり、そのやり取りと作業の結果として、集団参加し、自己統御できるようになると言える。

本研究は、このような相互補完的な成長が幼児期後期の成長の大きな特徴であることを明らかにした。また保育実践の視座として保育者は、表現活動や劇遊び等を介して、5 歳頃に言葉で想像する力が培われたかどうかを保育の判断基準にすることが肝要であろう。

(3) 自己統御領域と意志交換（言葉）領域との関連性

本研究では、自己統御領域に対して、意志交換（言葉）領域だけが関連性を示し（**表 4**）、自己統御の各課題のできなさが、意志交換（言葉）領域の各課題のできなさと段階的な関連を有することが明らかになった。自己統御とは、子ども自分が行動を自分でコントロールできているという自制心や粘り強さ等の感覚であり、自己調整能力でもある。自己調整能力について、秋田（2013）は、米国の Chetty, et al.（2011）の分析を引用し、幼児期の非認知的能力とされている対人能力や自己調整能力が、子どもが大人になった時に職場で評価されることを報告している。本研究において、自己統御領域と意志交換（言葉）領域との関連性を見出したことは、非常に興味深い。

他方、就学前に幼児教育を受けた群は、受けなかった群よりも非認知的能力を伸ばすことに効果があった報告（Cunha & Heckman,

2010）がある。これは、米国の40年間にわたる長期縦断的調査『Perry Preschool Project』（Heckman, et al., 2010）の結果を引用し、幼児教育が生涯に与える影響について検討したものである。よい幼児教育を受けた場合、知能指数に効果的な効果を及ぼしたわけではなく、自制心や粘り強さ等の感覚である非認知的能力を伸ばすことに効果があった。またこの能力は、信頼できる人間性につながり、幼児教育にとって非常に重要であると指摘されている。

(4)「言葉的存在」としての幼児

幼児における「言葉」の意義は、知的能力を構成する「言語発達」領域の質的伸長ということもあるが、幼児がその生活世界を営むための手段（媒介）として、絶えず「言葉」を使い続けていることに大きな意義があるのではなかろうか。このことは、同じく生活世界を営むための手段・媒介・基盤となっている「身体」と同様の意味合いを持つと考える。

「目安表」の評価結果をまとめた4（結果）で示したように、他者とのやり取り経験を通して獲得・伸長する「作業能力」に対しても、集団活動を通して社会性を獲得する「集団参加能力」に対しても、「自己統御能力」に対しても、「意志交換（言葉）領域」の育ちが大きく関連する。このような活動は、換言すれば幼児の外在対象（外在環境）・帰属社会・内的世界という生活世界の全方向に対して、その営みが持続・安定・活性化する際に「言葉」が手段（媒介）となっていることを示している。先にも述べた「（言葉の組織的獲得後に）その生活を言語化し…」という岡本（1982）の指摘は、まさに幼児期の「言葉」におけるこのような特徴を表現している。

さらに幼児期は、生活の中で絶えず「言葉」を使い続けているということでは、人の生涯の中でも際だった時期であり、このような活動特徴を示す幼児を、『「言葉的存在」としての幼児』とでも言い表すことができるのではなかろうか。幼児期後期は、「言葉」を使い続ける生活世界での営みが大きく花開く時期であり、それが実現出来る条件として、言語50（言語のみでの継続的な会話ができる）・言語56（過去の場面・状況・経験などを語ることができる）の課題獲得が、その際のターニングポイントになるのであろう。岡本（1982）が述べている「言葉の組織的獲得後に…」というのは、上記課題の成否と大きく関係するように思われた。幼児教育においては、言語発達の成就だけでなく、生活の中でとにかく言葉を豊かに使い続けることにも焦点を当てることが重要であろう。

6　おわりに

本研究では、幼児期後期における「言葉領域」に関する研究動向を概括した上で、「言葉領域」での育ちが、この時期の全体的な成長に対してどのような基盤となっているのかについて、「目安表」による予備調査結果データを援用し検討を試みた。このように本研究では、敢えて事例検討ではなく、幼児期後期の子ども55名を対象にした量的分析の機会を得た。その結果、幼児期後期おける「言葉領域」が基盤となり、「作業」「集団参加」「自己統御」の育ちを促進していく可能性が高いという知見も得た。その一方で、今後の研究を展望していく上での課題が3点残った。

まず、「目安表」そのものの信頼性・妥当性について。子どもの社会生活能力の発達を評価する標準尺度としてはデータ数が少なく、標準化を経た上での尺度にはなっていない。相応のデータ数に基づく標準化作業が課題である。

次に、データ収集上の課題について。幼児期後期における「言葉領域」と他の領域との関連

性について、今回は希有なデータの分析の機会を得たと言えるが、高い「言葉領域」を持ちながらも他の領域が低い子どももいる。また、幼児期後期における「言葉領域」の高さが、保育者からの言葉掛けに起因するのか、質のよい保育環境に起因するのか、明らかになっていない。データ数が多い場合、「言葉領域」と他の領域や起因等との関係を共分散構造分析で扱う「因果モデル」で検討することができる。今後、データ数を増やし、再検討することが課題である。

最後に、本研究で得られた「言葉領域」の発達と子どもの成長全般への関連については、どのような子どもの「言葉領域」の発達が高いのか、園での遊びの充実度はどうかといった、子どもの特徴を詳細に捉えるには至っていない。このため得られた知見を、子どもへの具体的な保育実践の方法へ結び付け難いという課題が残っている。この課題解決のため、園で生活している子どもの特徴を、質的量的に調査することも今後の課題である。幼児期後期における「言葉領域」の発達を詳細に明示することは、よりよい保育実践の視座を強化することに有効であろう。

以上、本研究で得られた幼児期後期における「言葉領域」の発達と、子どもの成長全般への関連について論考してきた。保育者がよりよい保育実践の視座を得るためには、「目安表」等を指標として活用し、「言葉領域」の発達と子どもの成長全般への関連を理解し、言葉を介して自己統御領域等を促進する保育の専門性をいかに持つかが、保育者に必要とされていると言えよう。

謝辞

本研究の実施にあたり、宇治福祉園の先生方に「目安表」調査のご協力をいただきました。心より感謝申し上げます。

引用文献

・秋田喜代美.（2013）. 今、“発達”をどうとらえるか　～子どもの育ちと保育の質～. 発達 134 号（pp.4-5）. ミネルヴァ書房.
・浅井彰子・伊藤龍仁.（2017）. 乳幼児の言葉の発達と絵本の楽しみ：「親子で絵本を楽しむ会」の取り組みを通して. 東邦学誌第 46 巻第 2 号（pp.113-125）. 愛知東邦大学.
・新井美保子.（2009）. 話し言葉. 保育内容言葉（pp.54-61）. 北大路書房.
・Bates, E.（1976）. *Language and context: The acquisition of pragmatics*（pp.49-71）. Academic Press.
・Chetty, R., Friedman, J.N., Hilger, N., Saez, E., Schanzenbach, D.W., & Yagan, D.（2011）. How does your kindergarten classroom affect your earnings ？：Evidence from Project STAR（pp. 1593-1660）. *The Quarterly Journal of Economics*, 126（4）. Oxford University Press.
・Cunha, F & Heckman, J.（2010）. Investing in our young people（pp.1-31）. *National bureau of economic research*.
・福丸奈津子・湯澤正通.（2018）. 幼児のワーキングメモリアセスメントによる言葉の発達相談支援. 福岡こども短期大学研究紀要第 29 号（pp.25-33）. 福岡こども短期大学.
・古相正美.（2011）. 乳幼児の言葉の発達と絵本. 中村学園大学発達支援センター研究紀要第 2 号（pp.37-44）. 中村学園大学.
・Heckman, J.J., Moon, S.H., Pinto, R., Savelyev, P.A & Yavitz, A.（2010）. The Rate of Return to the High/Scope Perry Preschool Program（pp.114-128）. *Medicine National Institutes of Health National*, 94（1-2）.
・石本啓一郎.（2014）. 幼児の書き言葉の発達に関する心理学的研究の課題　～媒介された思考と文字習得の共発達～. 立教大学教育学科研究年報第 58 号（pp.187-200）. 立教大学.
・近藤えみ子・山本理絵.（2013）. 集団での絵本の読み聞かせを通しての自閉症スペクトラム幼児の発達支援　～共同注意・情動の共有に着目しての実践の分析より～. 保育学研究第 51 巻第 3 号（pp.318-330）.

・教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会.（2017）. 教職課程コアカリキュラム. 文部科学省ホームページ（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/126/index.htm）.
・松田千都.（2016）. 乳幼児の発達. 保育原理（pp.18-29）. 教育出版.
・並木真理子.（2011）. 幼稚園における集団への同一絵本のくり返し読みの意義の検討　～入園年齢の幼児の身体的反応・言葉的反応とクラスの育ちとの関係から～. 乳幼児教育学研究第 20 号（pp.27-46）.
・並木真理子.（2012）. 幼稚園における読み聞かせの構成および保育者の動作・発話が幼児の発語に及ぼす影響. 保育学研究第 50 号第 2 号（pp.165-179）.
・文部科学省.（2017）. 幼稚園教育要領〈平成 29 年告示〉. フレーベル館.
・岡本夏木.（1982）. 子どもとことば（pp.9-10）. 岩波新書.
・里美恵子・河内清美・石井喜代香；竹田契一 / 監.（2005）. 実践インリアル・アプローチ事例集～豊かなコミュニケーションのために～（p.23）. 日本文化科学社.
・柴田長生.（2006）. 子どもの社会生活能力評価について　～標準化された評価尺度の試作と、知的障害児への評価から見えてきたこと～. 発達 106 号（pp.74-88）. ミネルヴァ書房.
・柴田長生.（2013）. 子どもの社会生活能力評価に関する検討　～「社会生活能力目安表」の信頼性・妥当性に関する追加検討～. 京都文教大学臨床心理学部研究報告第 5 号（pp.3-23）. 京都文教大学.
・柴田長生.（2014）. 知的障害児における社会生活能力の評価について 1　～社会生活能力目安表による評価の意義と妥当性について～. 京都文教大学臨床心理学部研究報告第 6 号（pp.13-37）. 京都文教大学.
・柴田長生.（2017）. 社会生活能力目安表改訂への試み. 京都文教大学臨床心理学部研究報告第 9 号（pp.37-48）. 京都文教大学.
・辻谷真知子.（2015）. 4 歳児の「許可を求める発話」に見られる規範意識　～判断基準としての他者参照～. 保育学研究第 53 巻第 1 号（pp.31-42）.
・辻谷真知子・秋田喜代美.（2014）. 新入園児の他者受容的認識への変容：4 歳児の「他者に言及する発話」に着目して. 乳幼児教育学研究第 23 号（pp. 13-24）.
・Wallon. H.（1983）. 浜田寿美男 / 訳編. 身体・自我・社会. ミネルヴァ書房.
・淀川裕美.（2009）. 2 ～ 3 歳児における言葉を用いた三者間対話の成立要因の検討　～第三者の発話と被参加者の応答に着目して～. 乳幼児教育学研究第 18 号（pp.63-74）.
・淀川裕美.（2010）. 2 ～ 3 歳児における保育集団での対話の発達的変化　～「フォーマット」の二層構造と模倣 / 非模倣の変化に着目して～. 幼児教育学研究 第 19 号（pp. 95-107）.
・淀川裕美.（2011）. 2 ～ 3 歳児の保育集団での食事場面における対話のあり方の変化　～確認し合う事例における宛先・話題・話題への評価に着目して～. 保育学研究第 49 巻第 2 号（pp.177-188）.
・淀川裕美.（2013）. 2 ～ 3 歳児の保育集団での散歩場面の対話のあり方の変化　～身体の位置、媒介物と話題、模倣 / 非模倣の変化に着目して～. 幼児教育学研究 第 22 号（pp.63-76）.

Abstract

Development of Vocabulary During Later Infancy and Its Relationship to a Child's Overall Growth: Improving Care and Education in Early Childhood

Chosei SHIBATA & Hiroko OHMORI

This paper summarizes research in vocabulary development during later infancy（ages three to six years）and its relationship to each child's overall growth during this time. This research included multi-regression statistical analysis regarding survey data on the extent of children's social abilities, as measured on a revised children's rating scale（Shibata, 2017）. As a result, the following four points were inferred:

1）a consistent use of vocabulary words begins in later infancy;
2）an increase in vocabulary during child-care affects work, group participation and self-control;
3）there is a relationship between children who cannot increase their vocabulary and children who cannot exercise self-control with problems;
4）the increase in vocabulary in later infancy has two benefits, which include enabling children to communicate continually using only language（at an average age of five years）and also enabling children to communicate about past situations, circumstances and experiences（at an average age of five years and six months）.

In summary, the knowledge gained from this study of later infancy supports the conclusion that vocabulary development promotes better work, group participation and self-control of each child. And as a result of this research, we can describe a better approach to the practice of early child-care and education.

Key words : development of vocabulary, later infancy, children's social abilities, care and education in early childhood